



佐井寺小学校の子どもたちの学び—「わかる力」を育てる取り組みとその成果—

東京大学大学院教育学研究科 教授 藤村宣之

吹田市立佐井寺小学校の先生方の授業を中心とした取り組みに、子どもの発達や学習の心理を専門とする立場から継続的に関わらせていただいています。特に最近、日本の子どもが全般的に苦手としている「わかる力」(思考力・判断力・表現力)を子ども一人一人が高める授業について、佐井寺小学校の先生方とともに研究と実践を進めてきています。

学力に関する国際比較調査の結果を詳細に分析すると、日本の子どもは、解き方が一つに定まる問題に対して学習した解法を適用して正確に答えを求めること(できる力)に優れていますが、一方で、様々な解き方や考えが可能な問題に対して知識を関連づけて自分の考えを表現し、理解を深めること(わかる力)が不十分であることが見えてきます。一方で、「わかる力」は、これからの社会において必要とされ、各国で今後の育成が目指されている力であり、「深い理解」「答えや解き方が一つに決まらない問題を解決する力」のように、日本の次期の学習指導要領などでも重視される方向で検討が進められています。

佐井寺小学校では「わかる力」の具体像を、①他者に思考過程を説明できる力、②結論に至る経過を表現できる力、③複数の情報や自身の経験などを関連づけながら考える力、④他者との関わりにより自身の考えを深める力として設定しています。そして、そうした力を高めるために、(1)子どもの多様な考えを引き出す発問→(2)個別の探究→(3)多様な考えを発表し関連づけるクラスでの協同探究→(4)それを生かした個別の探究という流れで展開される「協同探究学習」を中心とした授業が、国語科を中心に各教科で行われています。子ども一人一人の「わかる力」を高めるために、一人一人の子どもが自分で考えること(個別探究)と、その考えをクラス全体で共有し、結びつけて高めること(協同探究)を大切にしたい授業が継続的に行われているのです。それが、子ども一人一人を大切にしたい人間関係づくりにもつながっています。

たとえば、5年生の国語科の研究授業では、「百年後のふるさとを守る」の単元で、「意見を交流し合い儀兵衛の人物像について深く考えよう」という発問がなされました。子どもたちからは、個人でワークシートに考えをまとめた後で、「何回も村を救い人の命を救った、人のことを考える人」、「堤防も作り家業も元に戻した、最後までやりとげる人」、「未来のことを考えて堤防を造った、未来の村のために努力した人」のような多様な考えが発表されました。子どもたちは、登場人物の行動や発言を具体的な根拠として人物像を表現し、それらの発言を教師が子どものことばを生かして板書していくことで、一人一人の多様な気づきがクラスで共有されていました。また、その話し合いを生かして、個人がもう一度自分の考える人物像をワークシートに書くことで、一人一人が理解を深めていました。

さらに、そこで人物像について深めたことを並行読書の人物像の考察にも生かすという単元の構成で、一人一人がさらに探究を通じて理解を深めることも意図されていました。このように多様な考えをクラスで協同探究することを通じて、一人一人の児童が説明文や物語文の理解を深め、またお互いの考え方や感じ方について聴き合い深め合うという様子は、他の学年の授業でも多くみられています。

全国学力・学習状況調査では、佐井寺小学校の児童は、国語、算数ともに、また基本的知識・技能を問うA問題、知識・技能の活用を問うB問題ともに、本年度も全国平均や大阪府の平均を大きく上回る成績を示していました。特に、日本の子どもが苦手とする「わかる力」に関係するB問題の得点が全国平均を上回っていたことは着目すべき点であると考えられます。

たとえば、国語のB問題では、問題文中に示されたインタビューの様子の内容(インタビューされた人が話した内容と、そのときの表情や声の調子についての情報)を新聞記事として短くまとめて書くという記述式問題について、正答率が全国平均の34.7%を大きく上回り、無答率は1.6%(全国平均は4.0%)でした。問題文中に示された多様な情報を組み合わせることで自分の思考のプロセスを表現することといった「わかる力」の高さと、ことばで表現することへの積極的な姿勢がうかがえます。また、算数のB問題では、「キャップを10000個集める目標があり、現時点での見積り合計が概数(百位以下の切り捨て)で7000個であるとき、実際の計算をしなくても、あと3000個集めればよいとわかるのはなぜか」を考えてその理由を書く記述式問題の正答率が全国平均の22.3%を大きく上回っていました。また無答率は全国平均(15.3%)を大きく下回っていました。概数の意味をそれが使われる文脈と関連づけて理解するといった、日本の子どもが苦手としている数学的理解の深まりと自分の考えを表現する力の高さ(「わかる力」の高さ)がうかがえます。

以上のように、佐井寺小学校の「協同探究学習」を中心とした先進的な授業の取り組みを通じて、一人一人の子どもたちは、授業場面での発言やワークシートへの記述の面でも、また学力調査の得点や記述内容などの面でも「わかる力」を着実に高めてきています。また、その取り組みは、子ども一人一人がお互いの考えを聴き合い学び合う姿、お互いに認め合い支え合うなかでの一人一人の自己肯定感の高まりにもつながってきています。これからも先生方とともに、佐井寺小学校の子どもたちの学びの向上と育ちの支援に努めていきたいと思っています。

藤村宣之先生のプロフィール

東京大学大学院教育学研究科教授 専門分野 教育心理学/発達心理学

主な著書『数学的・科学的リテラシーの心理学—子どもの学力はどう高まるか—』(有斐閣)『児童の数学的概念の理解に関する発達の研究—比例、内包量、乗除法概念の理解を中心に—』(風間書房)

